

詠む広場

毎日俳壇

西村 和子選

井上 康明選

片山由美子選

小川 軽舟選

水筒の中は空っぽチューリップ

松戸市 森 美奈子

△評▽春なのに急に気温が上がった真昼。そんな陽気の公園を、季節が語っている。子供たちは半袖で走り回っているのだらう。

歌半ば声のつまりし卒業歌

東京 黒川さと子

△評▽歌の途中で思い出が込み上げ、声がつまってしまった。卒業式の当事者でなくとも。

日曜の朝刊ひらひら初日はり

八街市 山本 淑夫

見納めの渡船のゆくや臘月

尾道市 山口 恭子

春愁や法話を聞くも上の空

筑西市 大久保朝一

衣替へて昨日と違ふことが顔

河内長野市 守口 幸子

みどり子を抱かせてもらふ花の屋

東京 鈴木 智子

すべり白くへんて登り子等うらら

長浜市 中島 正則

三穂をへんて花を落としけり

大阪 池田 壽夫

石段に濡れて残りし春落葉

相模原市 はやし 央

初めての家庭訪問山椒

真岡市 下和田真知子

△評▽山国の新学期もしばらくたち、新しい担任の先生が家庭訪問にきた。尾根に咲く山椒が、人々と子供たちを見守っている。

太陽を閉じこめ夜のチューリップ

浦安市 上村美川喜

△評▽夜のチューリップは、厚く大きな花びらが、昼間の太陽を閉じこめるように咲いている。

菜の花の島よりフェリー始発便

浜松市 久野 茂樹

山笑ふなり南部富士津軽富士

越谷市 安原院半樹

噂は未来呼ぶ吉千年樹

加古川市 伏見 昌子

桜狩中十本を抜きけらす

宇陀市 泉尾 武則

花冷の池を競歩の靴のおと

相模原市 小山 鞠子

迷走は命のしるし蝶の道

東京 京野上 卓

入社式誓ヒアス跡も癒え

南房総市 山根 徳一

石ころもまた御仏や放哉哉

郡山市 寺田 秀雄

盆栽展上段に置く藤の鉢

福岡市 山本 眞弓

△評▽藤の花は、盆栽とはいえず垂れ下がる房が魅力。最上段に置いて、その姿をたっぷり見てもらおうというのである。

そとだけに光集めて花ミモザ

東京 徳原 伸吉

△評▽晴れた日のミモザの花は金色にかがやき、まさに光を集めているかのようなあざやかさだ。

まあまあの「今日の運勢」蜆汁

さぬき市 景山 典子

春ともし簞笥に遺る通知表

津山市 岡田 邦男

花の塵ひと夜に池を埋めけり

日野市 田村登代子

思ひ出は褪せず揃ひの春シヨール

松山市 島岡由美子

父母のこと子らのごと菊分

野洲市 宮田絵衣子

停泊の窓の灯りや春の宵

平塚市 森本富美子

春時雨たちまち富士をかくしけり

和歌山 くわはらりみ

ワッフルのほど良き焦げ目春の宵

野田市 押江 成行

薫風に鼻うごめかす駱駝かな

兵庫 小林 恕水

△評▽日本で飼われているラクダだらう。はるか西域の砂漠から飛んできた黄砂に、故郷の匂いを嗅ぎとったかのようにだ。

青麦や世界を拓く地平線

米子市 長田 遼平

△評▽地平線の先は沃野であってほしい。不安に満ちた世界に向けてるまなざしが力強い。

フリスビーめがけシエパード風光る

藤沢市 佐藤 一夫

紫雲英田の親子ゆきぬ風の雲

榎原市 佐藤 雅之

ちよつと真如までと遊きたし海響西風

大阪市 余田 酒梨

春闘や小さき工場の昼休み

奈良市 伊東 勝

未黒野や大観峰に立ちて見る

直方市 瓜生 碩昭

前龍にサッカーボール桜まじ

川越市 大野有之介

参道の木の芽冷たし津軽富士

東京 山田 勉

主なき薫の館の芽吹きをり

東京 鈴木 明治

<歌集>

新刊

<句集>

◇鈴木しげを季語別鈴木しげを句集「鶴主幸の季語別全句集。石田波郷、石塚友二、星野麥丘人に師事した鈴木氏の句業を追うことには「鶴」の歴史を振り返ることもある。△友二句やヒターシヨラの「かけら」△花の木は火色つくしぬ惜命忌△など師をしのぶ句も多い。△ティファニーの箱の中より花の種△田螺囃く利息が二円付いてをり△のようなあなたたかなエーモアからは麥丘人の句の面影のようなものを感した。(からん草・3000円)

◇抜井諒一「残影」 充実の第3句集。△持ち上げしよりで虫の踏ん張れる△ががんほの何処へ行つても行きまじまり△小さき命に向けられた視線があたたかい。△初蝶や水面の如き堂の床△白となり黄となり遠き蝶の影△言葉に無理をさせない自然体な表現が魅力的。(角川書店・2420円) (俳人・西村謙蔵)

◇馬場あき子「アスパラの芽立するころ」 樹木や小さな生き物をいつくしんでほのかな明るさを感じさせる。夫である岩田正氏亡き後の98歳を迎えた著者の第28歌集。△口中に卵育てる魚があてわが口中の歌がさびしい△(角川書店・2970円)

◇伊藤一彦「語りかける牧水 越境の歌びこ」 若山牧水を今どう読むのかを歌論や書家の榎倉善郎氏との対談などで伝える。牧水の歌が時代を越えて語りかけてくる。△なにゆゑに旅に出つるや、なにゆゑに旅に出つるや、何故に旅に 牧水△(歎脈社・2200円)

◇吉川宏志「一九七〇年代短歌史」 70年代に起きたトピックを主にあげ、それに関する評論や歌を資料として論じる。同年代に焦点をあてることで現代短歌を改めて見直す。(短歌研究社・3300円) (歌人・中川和子)